

《結婚手形》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニー協会紀要）第7号（1997年）の拙稿「ロッシニー全作品事典（1）《結婚手形》」。増補改訂した本稿を決定版としてHPに掲載します。

（2011年4月増補改訂／2014年8月再改訂）

I-2 結婚手形 *La cambiale di matrimonio*

劇区分 1幕のファルサ・コーミカ（farsa comica in un atto）

台本 ガエターノ・ロッシ（Gaetano Rossi,1774-1855）

全17景、イタリア語

原作 カミッロ・フェデリーチ（Camillo Federici,1749-1802）¹による5幕の喜劇『結婚手形（*La cambiale di matrimonio*）』（1791年）²

作曲年 1810年（10月半ば～11月3日以前）

初演 1810年11月3日（土曜日）、ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場（Teatro di San Moisè [初版台本の記載は Teatro Giustiniani in San Moisè]）

人物 ①トビーア・ミル Tobia Mill（バス [ブッフォ]）……商人
②ファンニ Fanny（ソプラノ）……トビーア・ミルの娘
③エドアルド・ミルフォール [ミルフォルトとも発音] Edoardo Milfort（テノール）……ファンニの恋人
④ズルック Slook（バス [ブッフォ]）……アメリカの商人
⑤ノルトン Norton（バス）……トビーア・ミルの出納係
⑥クラリーナ Clarina（メゾソプラノ）……ファンニの小間使い
他に、ミル家の代理人と執事たち（黙役）

初演者 ①ルイージ・ラッファネッリ（Luigi Raffanelli,1752-1821）

②ローザ・モランディ（Rosa Morandi,1782-1824）

③トンマーゾ・リッチ（Tommaso Ricci,?-?）

④ニコラ・デ・グレチス（Nicola de Grecis,1773-1826）

⑤ドメニコ・レモリーニ（Domenico Remolini,?-?）

⑥クレメンティーナ・ラナーリ（Clementina Lanari,?-?）

管弦楽 1フルート、2オーボエ、2クラリネット、1ファゴット、2ホルン、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器

演奏時間 序曲：約5分、全1幕：約70分

自筆楽譜 不明（未発見）

初版楽譜 Giovanni Ricordi,Milano,1847.（ピアノ伴奏譜）

全集版 I-2（未成立）

構成 註：全集版未成立のため解説の楽曲区分と表記法はROF上演プログラム（1995年と2006年）に準拠して異同を併記し、役の記載順序は2006年版に基づいて補正した。なお、序曲の音楽構成は現行リコルディ版に基づく。

ROF プログラム 1990、91、95 年	ROF プログラム 2006 年
序曲（Sinfonia）：変ホ長調、4分の4拍子、アンダンテ・マエストーゾ～4分の2拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ	
N.1 導入曲〈口うるさい老人がいらないから Non c'è il vecchio sussurrone〉（クラリーナ、ミル、ノルトン） — 導入曲の後のレチタティーヴォ〈でも御主人様、この手紙は Ma, signor questa lettera〉（クラリーナ、ミル、ノルトン）	

N.2 ファンニとエドアルドの二重唱〈私を愛していると言っておくれ Tornami a dir che m'ami〉(ファンニ、エドアルド) — 二重唱の後のレチタティーヴォ〈そう、愛しい人、期待しましょう Si, cara mia, speriam〉(ファンニ、エドアルド、ミル、ノルトン)
N.3 ズルックのカヴァティーナ〈ありがとう…ありがとう…いとしき友よ! Grazie... grazie... caro amico!〉(ファンニ、クラリーナ、エドアルド、ミル、ズルック、ノルトン) — カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈というわけで私を仕込んでください Sicchè dunque istruitemi〉(ファンニ、エドアルド、ミル、ズルック、ノルトン)

N.4 三重唱〈こんな素敵な債券のためなら差し上げましょう Darei per sì bel fondo〉(ファンニ、エドアルド、ズルック) — 三重唱の後のレチタティーヴォ〈できませんよ、きっと Non si farà, sta certa〉(クラリーナ、ノルトン)	N.4 レチタティーヴォ〈御意に! ヨーロッパでは Servo! Proprio in Europa〉、ファンニとズルックの二重唱〈こんな素敵な債券のためなら差し上げましょう Darei per sì bel fondo〉(ファンニ、ズルック)
N.5 クラリーナのARIA〈私だってまだ若いわ Anch'io son giovane〉(クラリーナ) — ARIAの後のレチタティーヴォ〈ちょうど現れた: 何やら考え込んで Eccolo appunto: pare penseroso〉(ズルック、ノルトン)	N.5 三重唱〈あの愛くるしい顔 Quell'amabile visino〉(ファンニ、エドアルド、ズルック)
N.6 ミルとズルックの二重唱〈早く言ってください、どこにあるか Dite presto, dove sta〉(ミル、ズルック) — 二重唱の後のレチタティーヴォ〈いらして、彼らは行ってしまったわ Venite, sono andati〉(ファンニ、クラリーナ、エドアルド、ズルック)	N.6 レチタティーヴォ〈できませんよ、きっと Non si farà, sta certa〉とクラリーナのARIA〈私だってまだ若いわ Anch'io son giovane〉(クラリーナ、ノルトン) — ARIAの後のレチタティーヴォ〈ちょうど現れた: 何やら考え込んで Eccolo appunto: pare penseroso〉(ズルック、ノルトン)
N.7 レチタティーヴォ〈黙ってですって Come tacer〉とファンニのARIA〈この喜びを貴方に伝えたいのです Vorrei spiegarvi il giubilo〉(ファンニ) — ARIAの後のレチタティーヴォ〈私も思うがね Eppure lo cred'anch'io〉(ミル、ズルック)	N.7 レチタティーヴォ〈抵当物件! ちきしょう! Ipotecato! Diavolo!〉と、ミルとズルックの二重唱〈早く言ってください、どこにあるか Dite presto, dove sta〉(ミル、ズルック) — 二重唱の後のレチタティーヴォ〈いらして、彼らは行ってしまったわ Venite, sono andati〉(ファンニ、クラリーナ、エドアルド)
N.8 ミルとズルックの二重唱〈私もこんなふうに帽子をかぶって Porterò così il cappello〉(ミル、ズルック)	N.8 レチタティーヴォ〈お見事! Bravi!〉とファンニのARIA〈この喜びを貴方に伝えたいのです Vorrei spiegarvi il giubilo〉(ファンニ、エドアルド、ズルック)
N.9 フィナーレ〈何という怒りに、おお天よ、燃え上がって Qual'ira, oh ciel, v'accende〉(ファンニ、クラリーナ、エドアルド、ミル、ズルック、ノルトン)	N.9 レチタティーヴォ〈私も思うがね Eppure lo cred'anch'io〉と、ミルとズルックの二重唱〈私もこんなふうに帽子をかぶって Porterò così il cappello〉(ミル、ズルック)
	N.10 四重唱〈何という怒りに、おお天よ、燃え上がって Qual'ira oh, ciel, v'accende〉(ファンニ、クラリーナ、ミル、ズルック)
	N.11 六重唱フィナーレ〈お願いです、少しの間 Vi prego un momento〉(ファンニ、クラリーナ、エドアルド、ミル、ズルック、ノルトン)

物語 (時と場所の指定なし。ナンバーを全9曲で示し、[]内に全11曲の区分を補足)

商人トビーア・ミルの家。出納係ノルトンと小間使いクラリーナがファンニの結婚の噂話をしている。そこへ主人のミルが地球儀を手に現れ、アメリカからヨーロッパへの航路について頭を悩ませていると、カナダの取引先ズルックの手紙が届く。ズルックはその手紙で商品を求めるように結婚相手の調達をミルへ依頼し、これに関

する約束手形を振り出していた。ズルックに借金のあるミルは、自分の娘ファンニを彼に娶らせることで借金帳消しを思い立つ (N.1 導入曲)。だが、ファンニは父に内緒でエドアルドと恋に落ちていた。

二人が愛を囁き、結婚を誓い合っていると (N.2 ファンニとエドアルドの二重唱)、ノルトンが来て手紙の一件を教え、恋人たちは困惑する。不意にミルが現れ見知らぬ青年を見咎めるが、ノルトンはとっさに「新任の簿記係です」と偽り、その場を収める。そこに奇妙な姿をしたズルックが到着し、不作法な振る舞いで一家を驚かせる (N.3 ズルックのカヴァティーナ)。ズルックは一目でファンニに惚れ込むが、彼女は断固として拒絶する。結婚を迫るズルックと拒むファンニ。エドアルドも口を挟んで大騒ぎになる (N.4 [N.4-5] 三重唱)。

三人がいなくなるとノルトンとクラリーナが現れ、クラリーナは恋について自分の考えを述べる (N.5 [N.6] クラリーナの aria)。ズルックが来てファンニへの思いをつのらせるので、ノルトンは「あなたの債権はもう抵当に入っている」と、事の次第を仄めかす。ファンニに恋人がいると悟ったズルックは、ミルへ結婚取消を通告するものの、訳が判らぬミルは頭に血が上って決闘を言い渡し、その場を去る (N.6 [N.7] ミルとズルックの二重唱)。ファンニやエドアルドとの会話ですべてを理解したズルックは、二人の結婚を成就させてやろうと手形へ裏書きし、感激したファンニは溢れる喜びを歌う (N.7 [N.8] レチタティーヴォとファンニの aria)。

ピストルと剣を召使に持たせたミルが現れ、決闘を宣言する。馬鹿にしながらも挑発にのつたふりをするズルック (N.8 [N.9] ミルとズルックの二重唱)。不穏ななりゆきにファンニが割って入るが納まらないので、エドアルドがズルックの裏書きした結婚手形を持ち出し、ミルへ支払いを求める。皆で自分を騙したとミルは腹をたてるが、ズルックの巧みなりなしで、最後には娘と恋人の結婚を承諾する (N.9 [N.10-11] フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

1809 年末、ボローニャのリチェーオ・フィラルモーニコ (1804 年設立の音楽学校) での修学を終えたロッシーニは、続いて 1809/10 年謝肉祭にフェッラーラのコムナーレ劇場のマエストロ・アル・チェンバロを務めた (maestro al cembalo。オペラの声楽指揮者で歌手に稽古もつける職種)。春にはボローニャのアッカデーミア・デ・コンコルディのマエストロ・アル・チェンバロを務め、夏には後年《デメトリオとポリービオ》の題名で初演されるオペラ・セーリアを習作した³。続いて作曲したのが、ロッシーニのオペラ作曲家としての正式なデビュー作となる 1 幕のファルサ・コーミカ《結婚手形》である。作曲に至る経緯は次のとおり。

1810 年 8 月、作曲家ジョヴァンニ・モランディ (Giovanni Morandi, 1777-1856) とその妻で人気歌手のローザ・モランディ (Rosa Morandi, 1782-1824) がボローニャに逗留した。ローザはヴェネツィアのサン・モイゼ劇場 (Teatro di San Moisè [初版台本では Teatro Giustiniani in San Moisè]) の秋のシーズン (9 月 15 日~12 月) にプリマ・ドンナを務める契約を結び、ヴェネツィアに赴く途上ボローニャに立ち寄ったのである。ロッシーニの両親と旧知のモランディ夫妻は、このときジョアキーノの音楽的成長にふれる機会もあったようだ (伝記作者ラディチョッティは、ロッシーニの母がモランディに会いに行き息子の成長ぶりを話し、オペラを作曲して上演したがっているのを機会を与えてほしいと頼んだという)⁴。

その後ローザ・モランディはサン・モイゼ劇場に出演したが、予定された 5 作の新作ファルサのうち五つ目の作曲が間に合わないことが明らかになった。頭を抱える興行師アントニオ・チェーラ (Antonio Cera, ?-?) にローザが推薦したのがボローニャで再会した青年ロッシーニだった。プリマ・ドンナの推薦を受けたチェーラは無名のロッシーニに作曲を依頼⁵、ロッシーニも直ちにヴェネツィアに赴き (10 月半ばと推測)、ガエターノ・ロッシ (Gaetano Rossi, 1774-1855) の台本による 1 幕のファルサ・コーミカ《結婚手形 (*La cambiale di matrimonio*)》を、数日間で作曲した。原作はカミッロ・フェデリーチ (Camillo Federici, 1749-1802) の 5 幕の喜劇『結婚手形 (*La cambiale di matrimonio*)』(1791 年) である。

稽古では次のトラブルが生じたと伝えられるが、これはドイツ音楽に親しむロッシーニが管弦楽のパートを重視したことが原因と思われる——「最初の稽古で何人かの役者たちは、作曲者が自分たちのパートの幾つかを変更し、なおかつ自分たちの声を圧倒するやかましい管弦楽伴奏をもっと薄くしなければ歌わないと主張した。ロッシーニは家に帰り (モランディ夫妻は彼を寄宿させていた)、自分の部屋に閉じ籠るとわっと泣き出した。すぐに劇場のマエストロが彼を励ましに来て、劇場の慣習や歌手たちの自惚れが求める楽譜の変更の手助けをしてやった。少年はモランディの経験と知識に助けられ、ファルサは無事演奏されることになったのだった。」⁶

1810 年 11 月 3 日に行われた初演は、ジュゼッペ・ファリネッリ (Giuseppe Farinelli, 1769-1836) 作曲のファルサ《結論を急ぐなかれ、または真の感謝 (*Non precipitare i giudizi, ossia La vera gratitudine*)》との二本立てで行わ



ローザ・モランディ

れた。《結婚手形》の評判はまずまずで、初演翌日の地元紙は、公演が「順調 (felice)」に運び、モランディの歌うアリア (N.7) が好評だったと報じている (『クォティディアーノ・ヴェネト (*Quotidiano Veneto*)』1810年11月4日付) 7。後年ロッシーニは、このオペラを200フランの報酬で契約したが、それは「当時の自分には少なからぬ金額に思えた」と語っている8。

【特色】

ロッシーニのデビュー作となるこの作品は、若々しい青春の息吹を感じさせる反面、若書きの未熟さも否定できない。序曲 (シンフォニア) が旧作の転用であることを除いてすべて書き下ろしであるが9、随所にモーツァルトやハイドンといった前時代の様式や楽風も見られる。当然のことながら同時代のイタリア作曲家の影響や模倣もあるに違いないが、それらとロッシーニの初期の作風を峻別するのは現時点では不可能といえる。序曲はボローニャ音楽学校時代に試験課題として作曲した《シンフォニア、変ホ長調》(1809年8月25日、同校の成績優秀者の受賞式で初演) の転用で、冒頭の総奏はモーツァルトの《魔笛》序曲を意識した可能性がある (後年ロッシーニは、学生時代に《魔笛》の序曲を知って同じような曲を作ろうとしたがうまくいかなかった、と述べている) 10。

九つのナンバー (もしくは前記11のナンバー) は、勢いのある導入曲〈口うるさい老人がいらないから (*Non c'è il vecchio sussurrone*)〉(N.1) と三重唱〈あの愛くるしい顔 (*Quell'amabile visino*)〉(N.4 [または N.5] の後半部。但し、処理の仕方はまだ浅い) の掛け合いが秀逸で、ズルックのカヴァティーナ〈ありがと〜ありがと〜いとしき友よ! (*Grazie... grazie... caro amico!*)〉(N.3) に後年ロッシーニがバッソ・ブッフオに好んで与えた楽想が顔を覗かせ、ファンニのアリア〈この喜びを貴方に伝えたいのです (*Vorrei spiegarvi il giubilo*)〉(N.7 [または N.8]) のアレグロ部には《セビーリヤの理髪師》第1幕ロジーナとフィガロの二重唱〈それでは私なのね…嘘じゃないわね? (*Dunque io son...tu non m'inganni?*)〉の楽句も先駆的に使われるが11が、全体に個性の発現に乏しく、天才的な着想や後のロッシーニに顕著なエネルギーの横溢は感じられない。それゆえ加速度的に個性を開花させていったロッシーニの歩みを知る者が、本作に物足りなさを感じても仕方ないだろう。《結婚手形》はロッシーニが才能を十全に開花させたオペラではなく、多くの初期作品と同様、若き作曲家の出発点としてのみ好意的に捉えるべき作品であり、管弦楽の用法も後期ナポリ派の作曲家ドメニコ・チマローザや、同時代に高い評価を得たシモーネ・マイルのそれと同質である。

復活上演に伴って出版されたりコルディ版ピアノ伴奏譜(1910年、筆者所蔵)



【上演史】

1810年11月3日にサン・モイゼ劇場で行われた初演は一定の評価を得て、12月1日までに12回の上演が行われたものの、その後同劇場では再演されなかった (この事実は、作品の人气がとくに高くなかったことを意味する)。イタリアでは翌1811年6月にパドヴァのヌオーヴォ劇場、7月以降にヴィチエンツァのエレターニオ劇場、1814/15年謝肉祭シーズンにクレモナのコンコルディア劇場、1815年1月にローマで再演をみただけで終わった12。国外では1816年4月26日にバルセロナ、1834年10月2日にウィーン (ケルトナートーア劇場。《カナダの花婿 (*Der Brautigam von Canada*)》と改題した独語訳) で上演され、その後1837年5月3日のウィーンでの伊語上演を最後に演目から消えている。

復活上演は1910年4月23日、ヴェネツィアのフェニーチェ劇場で初演100周年を記念して行われ、その後は1927年5月5日トリノ (ヴィットーリオ・グイ指揮)、1936年2月29日 (ロッシーニの誕生日に当たる) のペーザロなどイタリア各地で取り上げられ、1937年11月8日にはニューヨークでアメリカ初演、1954年4月23日にはロンドンでイギリス初演も行われた。日本初演は来日したローマ室内歌劇団 (レナート・ファザーノ指揮) により、1970年6月19日、大阪フェスティヴァル・ホールで行なわれた。ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルでは1991年8月19日に初上演されたが、全集版未成立のためリコルディ版を使用している (2006年も同様だが、前記のように楽曲区分に変化を生じている)。

推薦ディスク

・2006年8月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演、2008年発売、海外盤

NAXOS 2.110228 [1DVD] ウンベルト・ベネデッティ・ミケランジェリ指揮ボルツァーノ・トレント・ハイドン管弦楽団 ①パオロ・ボルドーニャ ②デジレ・ランカトーレ ③サイミール・ピ



1991年 ROF
プログラム



- ¹ カミッロ・フェデリーチは筆名。本名：ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴィアッソロ Giovanni [またはジョヴァン Giovan] Battista Viassolo
- ² フェデリーチ原作とロッシ台本の間にジュゼッペ・ケッケリーニ (Giuseppe Checcherini, 1777-1840) によるオペラ台本《為替手形による結婚 (*Il matrimonio per lettera di cambio*)》(カルロ・コッチャのデビュー作。2幕のブルレッタ)があり、1807年11月14日にローマのヴァッレ劇場で初演されている。しかし、ロッシがケッケリーニ台本を下敷きにした可能性は少ないと思われる (Cacaci, Francesco. *La cambiale di matrimonio da Federici a Rossi*, in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, 1975., n.1-2 所収参照)。
- ³ 従来の文献では作曲年が1808年や1809年以前とされたが、現在は1810年夏と認定されている。
- ⁴ Radiciotti, Giuseppe. *Gioacchino Rossini: Vita documentata. Opere ed influenze su l'arte, Vol.I.*, Arti Grafiche Majella di Aldo Chicca, 1927., pp.56-57. ローザ・モランディについては水谷彰良『ブリマ・ドンナの歴史 II』(東京書籍、1998年) pp.148-159.を参照されたい。なお、作曲依頼の手紙や契約書は現存しない。
- ⁵ 多くの文献が《結婚手形》を委嘱した興行師をカヴァッリ侯爵 (フランチェスコ・カヴァッリ Francesco Cavalli, 1765頃-1830頃) とし、同侯爵が1806年頃に少年ロッシーニを知るに至った経緯をロッシーニの証言に基づいて紹介している。けれどもカヴァッリがサン・モイゼ劇場の興行師を務めたのは1806年秋季~1807年謝肉祭のみで、1808年秋から1813年までサン・モイゼ劇場の興行権を得たのはアントーニオ・チェーラである。チェーラがサン・モイゼ劇場で単独に興行権を得たのは1810年秋季からで、同年3月15日に結ばれた契約では1810年秋季と続く謝肉祭シーズンをセットで貸与され、「八つの新作ファルサと、これとは別に良い結果の得られた複数のファルサとオペラを劇場の求めに応じて上演する」とされている。サン・モイゼ劇場の上演システムについては、水谷彰良『サン・モイゼ劇場のレパートリー変遷と上演システムに関する試論』(『ロッシニアーナ』第26号 pp.1-21)を参照されたい。
- ⁶ Radiciotti., op.cit. vol.I., p.57.
- ⁷ Appolonia, Giorgio. *Le voci di Rossini*, Eda, Torino, 1992., p.38.
- ⁸ ヒラーへの述懐。Hiller, Ferdinand. *Plaudereien mit Rossini*, 16., 1855., in *Bollettino del Centro rossiniano di studi*, Anno XXXII, Fondazione Rossini, Pesaro, 1992., p.105.
- ⁹ 但し、旋律の一部は習作期の〈溪流から (*De torrente*)〉(1808年以前作曲)の中でも使われている。
- ¹⁰ ヒラーへの述懐。Hiller., op.cit., p.129.
- ¹¹ そのパッセージはセバスティアノー・ナゾリーニ (Sebastiano Nasolini, 1768c-99) 作曲《セミラーミデの死 (*La morte di Semiramide*)》(1790年) 第1幕セミラーミデのアリア〈Serbo ancora un'alma altera〉からの借用である可能性が高い。
- ¹² 1811年春のトリエステのグランデ劇場を挙げる文献もあるが、同劇場の上演記録で確認できず除外した。